

D・E・ザトラー編フランクフルト版ヘルダーリン全集について

——その歴史的総括の試み

益 敏郎

ヘルダーリン研究や編集文献学の界隈のみならず、一般的な読者層をも巻き込んでセンセーションを起こした史的批判版ヘルダーリン全集、通称フランクフルト版の登場から、半世紀が経とうとしている。この間にフランクフルト版が文学研究や学術編集のあり方に与えた影響には、計り知れないものがある。編者のD・E・ザトラーは、ゲルマニストとしてキャリアを築き全集の編纂にいたるとする「正道」ではなく、ギムナジウム卒業資格アビトゥアも持たない在野の研究者として、いわばゲリラ的にフランクフルト版を刊行した。まず記者会見を通じて世に問うたのが、いくつかの作品を例に独自の編集方法を提示する『手引き』(Einleitung)であり、これが1975年のことだった。この試験版の出版は、その公開方法を含め全集の出版としては異例の行為だったが、ここにザトラーの論争的対立を演出するセンセーションナリズム、先進的なメディア感覚、獐犇な戦略的知性がよく現れている。これを機にスタートしたフランクフルト版は、ヘルダーリン研究の新境地を切り拓くことになり、その革新的な編集理念と実践によって、学術編集の歴史においても一つの里程碑となった。ザトラーはフランクフルト版完成後の2009年、その功績が認められヘルダーリン賞を受賞し(現在に至るまで全集の編者としては唯一の受賞である)、2021年には彼の名を冠する図書・アーカイヴ施設(Sattler-Bibliothek)がバート・ホンブルクに開設されるに至っている。このようにザトラーならびに彼のフランクフルト版は、時の試練を経て、すでに揺るぎない歴史的評価を勝ち得たようにも見える。

しかしフランクフルト版全集をめぐる言説を改めて検証していくと、また違った様相が見えてくる。フランクフルト版登場時のセンセーションは、まさしく毀誉褒貶が入り乱れたと言うべきもので、全集版として使用される頻度は現在にいたるまで安定して高いにもかかわらず、その学術編集への評価は今なお割れたままである。忘れてはならないのは、フランクフルト版の刊行が、1975年の試験版から2008年の最終巻まで、実に30年を超える長期プロジェクトだったということだ。大きな関心を集め、新しい研究動向と共にあった70、80年代と、コンパクトで扱いやすく信頼性の高い二つの普及版全集——ヨッヘン・シュミット編集のドイチャー・クラシカー版、ミヒャエル・クナウプのミュンヘン版——が登場した90年代、そして完成にこぎつけた2000年代とでは、研究状況も議論の空気も大きく違う。そして何よりザトラーの編集方針それ自体が、プロジェクト開始時と完成段階とはその力点を大きく変化させているように思われる。フランクフルト版の本来の眼目は、ヘルダーリンの未完の後期詩をより適切に編集することだと言ってよく、その意味でプロジェクト終盤の2000年によく出版された待望の第7、8巻(gesänge I, II)こそが、全集の最重要にして総決算の巻となるはずだった。しかしこの巻における編集は、他の先行する全集に取って代わる決定版になるところか、

フランクフルト版のプロジェクトそのものの限界を露呈させるような問題点を多く抱えていた。それゆえフランクフルト版の意義を総括する議論は、華々しい登場時に比して遙かに低調で、今なお不十分にしか行われていない¹。

本稿は以上のような認識に立って、改めてフランクフルト版ヘルダーリン全集の歴史的な意義と限界を明らかにし、今後の学術編集の課題について考察することを試みる。ただし長大なプロジェクトであるフランクフルト版のすべてをここで扱うことは論者の身に余ることであるし、ザトラーがさまざまな媒体で書いてきたアジテーションのようなものを含む文章群を、網羅的に検証することも現段階ではできていない。そもそも、次々に交代し仲違っていくたようにも見える編集協力者たちとザトラーの関係など、具体的な編集過程の実態についてはほとんど明らかになっておらず、今後の研究を待つべき問題も少なくない。こうしたなかで本稿は、フランクフルト版全集の起点と終点にフォーカスする。すなわち出発時の時代背景や言説状況、とくに成功をもたらしたポイントなどを整理し、一方で第7、8巻において露呈した問題点を明らかにするだろう。前者が第1、2章、後者が第3章にあたる。その際にヘルダーリンの専門家ですら悲鳴を上げるフランクフルト版の複雑なシステムを、一部ながら解説することを試みている。そして最後の第4章で、フランクフルト版の問題点の原因を考察し、今後の学術編集、とりわけ邦訳の全集を考える際の課題について論及するだろう。

なお日本における研究に目を向けてみるならば、フランクフルト版ヘルダーリン全集をテーマとした論文は管見の限りいまだ書かれたことがない。このことは、扱いが困難な全集版を使わざるを得ない限られた数の研究者を除いて、その実態を知る機会が得られない状況が続いているということの意味する。それゆえ本稿は、単にドイツ文学研究への寄与となるだけでなく、この歴史上まれな存在価値を持つ史的批判版全集を、日本の編集文献学の議論において参照可能なものにする一助となるかもしれない。

1

まずザトラーが、フランクフルト版を出版するまでの経緯を確認しておこう。参照元となるのは、いくつかの新聞雑誌記事に加えて、「史的批判版全集の作業場のインターネット・アーカイヴ」と称し、おそらくザトラー自身によって管理されているホームページである²。なおこのホームページ内の文章は、かつての象徴主義詩人シュテファン・ゲオルゲやそのサークルを思わせるような、名詞の頭文字を小文字にするという現代ドイツ語表記に反する方法で、ピリオドもウムラウト等の特殊文字も一切用いない、という非常に読みづらいスタイルで書かれている。このような奇を衒った振る舞いのはっきりした理由は不明だが、これはホームページが運用され始めた2000年前後からザトラ

¹ 本稿は、2023年7月15日の編文研シンポジウム「ヘルダーリン学術版編集の歴史——翻訳のための編集を考える」で行った口頭発表に、大幅な加筆修正を行ったものである。

Burdorf (1993) はプロジェクト途中でありながら、フランクフルト版に対して包括的かつ的確な把握を行っている。本稿はこうした成果を参考にしながら、フランクフルト版の終盤に関する考察を加えていく。

² Vgl. <http://www.hoelderlin.de/> (Zugang: 28.11.2023)

ーがとくにこだわり始めた書き方のようで、たとえば同時期に出版されたフランクフルト版の第7、8巻の文章も、このスタイルが貫かれている。

通常D・E・ザトラーと表記されるディートリヒ・エーバーハルト・ザトラー (Dietrich Eberhard Sattler) は1939年10月8日に、チューリンゲン州のアポルダで生を受けた。1953年に家族と当時の西ベルリンへ亡命し、58年から国立の工芸学校でグラフィックやタイポグラフィを習い始めている。これは結局正規の修了には至らなかったようだが、その際にヘルダーリンの4つの未完の詩を、木版画の挿絵付きで出版するなど³、ヘルダーリンとの関わりはこの時期には始まっていた。そして70年代になって、ザトラーはヴェルテンベルクのアーカイヴを訪ね、ヘルダーリンの手稿を調査し、最も権威のあるヘルダーリン全集、通称シュトットガルト版への批判的立場を鮮明にするようになる。ここに出版社ローター・シュテルンのK・D・ヴォルフが現れて、フランクフルト版の計画が始動するのである。

社会主義ドイツ学生同盟 (SDS) のトップを務めたこともあるK・D・ヴォルフがザトラーを知ったきっかけは、彼が作成したヘルダーリンとヘーゲル、そしてヘルダーリンとマルクスの風刺画ポスターを偶然見かけ、興味を持ったことである⁴。ザトラーによれば、その後訪ねてきたヴォルフとの会話のなかで、「テキスト原理主義 (Texttreue) に身を固めたゲルマニスティクに赤っ恥をかかせる」用意があるとヴォルフに伝え、その数日後にはフランクフルト版の刊行計画が具体的に進み始めたのだという⁵。それから翌年の1975年8月6日には、早くもフランクフルター・ホーフで会見を開き、すでに述べた試験版の発表でセンセーションを巻き起こすのである。

ローター・シュテルン (社名を日本語に直すと「赤い星」) は、60年代の学生運動から生まれた出版社であり、メディアの反応は「ヘルダーリンの頭上に輝く赤い星」、「左からのヘルダーリン」、「マルクスがヘルダーリンを読む時が来たのか」というイデオロギー性に注目する論調だった⁶。ザトラー自身は、学生運動に積極的だったわけでも、政治信条としてマルクス主義を奉じていたわけでもなかったと言われる⁷。しかしこのメディアによるヘルダーリン左翼化の指摘は、単にローター・シュテルン社の政治的急進性を根拠とする揶揄とも言いきれない。ここにはヘルダーリン言説の歴史的コンテクストがあり、それを踏まえた評言だと考えられるからである。

1960年代から70年代にかけての西ドイツにおいて、歴史問題への対決や権威主義への批判の機運が高まるなか、ヘルダーリン研究もまた大きな転機を迎えていた。そのメルクマールを二つだけ挙げておこう。一つ目が、フランスの研究者ピエール・ベルトー

3 Vgl. <http://www.hoelderlin.de/materialien/html/vier-00-01.html> (Zugang: 28.11.2023)

4 Vgl. <http://www.hoelderlin.de/materialien/html/siebdruck-1.html>; <http://www.hoelderlin.de/materialien/html/siebdruck-2.html> (Zugang: 28.11.2023)

5 Vgl. Müller (2001).

6 Vgl. Burdorf (1993), S. 168. なお「マルクスがヘルダーリンを読む時が来たのか」という言葉は、トーマス・マンのエッセイ『文化と社会主義』(Kultur und Sozialismus, 1928年)における言葉をもじったものである。

7 ザトラーの子どもたちによれば、彼は革命的なものを好む傾向はあったものの、とくに左翼的な政治信条は持っていなかったという。Vgl. Biener (2021).

による、ヘルダーリン革命詩人テーゼとも言すべき主張をくり広げた一連の研究⁸、二つ目が革命をめぐる政治的議論を盛り込み、マルクスとヘルダーリンの出会いを創作して大きな話題を呼んだペーター・ヴァイスの歴史劇『ヘルダーリン』(1971年初演)である。この二つは、ヘルダーリンとフランス革命、またその影響下で起きたドイツ国内の革命運動との関連を強調するだけでなく、1960、70年代の政治的世界にヘルダーリンを巻き込んでいくものだった。それは同時に、ナチス時代にヘルダーリンの政治利用に加担した過去を清算することなく、詩的世界を現実から切り離して自己保身を続けてきた文学研究の権威ないし伝統への挑戦であり、ヘルダーリンを専門家の閉じられた世界からアクチュアルな現実へ向けて解放しようという挑発でもあった。

ザトラーのフランクフルト版はまさにこうしたことを学術編集の領域で行おうとするものだったと言える。この領域における権威に相当するのは、ナチス時代に国家的な支援を受けてスタートしたフリードリヒ・バイスナー編集のシュトゥットガルト版全集である。ザトラーは、確固たる評価を受けていたこの全集版を名指して批判し、その対案としてフランクフルト版を提示したのである。

2

それではフランクフルト版はどのような理念に基づいて、いかなる編集システムを構築したのか。本章ではこの点を、とくにフランクフルト版のスタート時に焦点を当てて明らかにしていく。

彼が1976年にヘルダーリン協会で行った講演をもとにした論考「ヘルダーリン・フランクフルト版——その編集原理と編集モデル」は、アヴァンギャルドの綱領文めいた断章形式で書かれている。そこでザトラーは、「あらゆる形式のテキスト選定を認めない」と宣言する⁹。それは、仮想敵であるバイスナーの編集方針が、ザトラーの理解するところでは「テキスト選定の原理」に従っていることを意味する。つまり未完のまま残されたテキストが美的基準によって調整され、完成された作品の形に限界まで近づけられる。そこから漏れたテキストは、脇に追いやられる。その結果、読解用のレーゼテキストと異文 (Lesetext und Lesart)、テキストと資料篇 (Text und Apparat) のような形で正副、高低、上下の価値づけを含んだ提示方法に行き着く。ザトラーはこのことを「テキスト選定」だと批判するのである。とくに問題視されるのは、編集者が読者の目の届かない場所で選定を行って、処理済みの結果だけ提示している点だ。なぜなら、直接アーカイヴに赴いて資料を確認するなどしない限り、読者は編集者を正当に批判する方法を持たないのであり、編集者と読者の間に不公正な(とザトラーが見る)関係が構造的に生まれてしまうからである。

これに対してザトラーが持ち出す編集モデルが、ドキュメント部とエディション部の二部構成であり、何より大きな衝撃を与え、フランクフルト版の代名詞のようになったのが、ドキュメント部で取行されたファクシミリによる手稿の視覚的再現と、難読をきわ

⁸ 例えば Bertaux (1969) を参照。

⁹ Sattler (1975/77), S. 116.

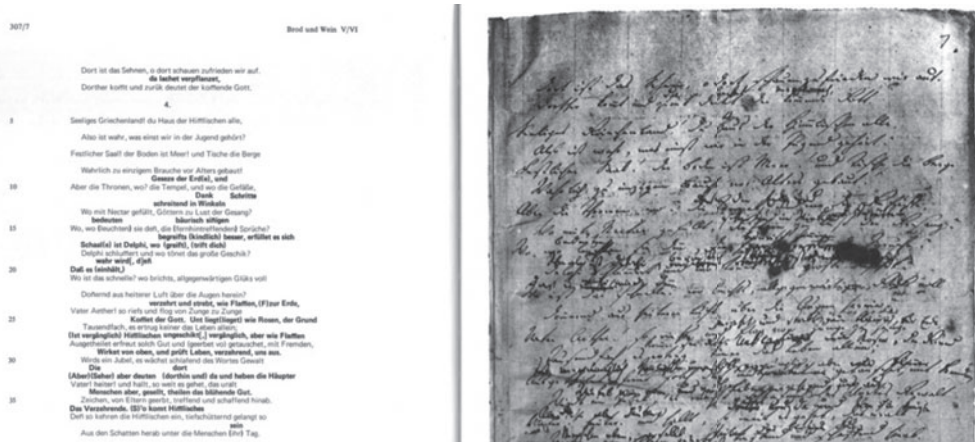


図1 FA6, S. 226f. より

エレギー「パンとぶどう酒」のドキュメント版。右がファクシミリで、左のページで書き起こしが行われている。左上の307/7は手稿の資料番号。太字で書かれているのが、後に書き加えられた言葉であることを示している。

める手稿の文字起こしである。とくに後者の文字起こしは、一枚の紙に時期も順序も着想もばらばらに書きつけるヘルダーリンの草稿を、インクの種類などから詳細に分析し字体や字の太さを細かく分けて表記し、当時最新の植字技術を取り入れて字の位置を正確に再現することで、手稿の写実的転写を可能にするという驚くべきものだった(図1)。これは今まで密室で処理されていたリソースが公開され、透明な存在になりおおせていた編集者の特権的な立場が切り崩されたことを意味する。編集者は今や自らの判断の主観性が可視化されうる場所に引き下ろされたのだ。一方で読者は、編集者への批判が可能となる素材を与えられたことで、自らで編集を行う可能性すら獲得したことになる。「編集者は読者以上でも以下でもない」¹⁰というザトラーの言葉は、ドキュメント部の編集方法の論理的帰結である。編集者の権威が批判され、読者に批判的自立の可能性が与えられるのだ。

またこのドキュメント部は、編集の素材提供としてだけでなく、テキストの構成部としてそれ自体独立した価値を持っている。というのも、エディション部が生成論的な観点からのテキストの時間的再構成を目指すとするれば、ドキュメント部はテキストの空間的表現を提示するのであり、テキストの豊かな可能性をより原初的な形で提示することになると考えられるからだ。それゆえザトラーは、ドキュメント部のテキストを、「いくつもの出口を持つ可能性の迷宮」と表現する。この時エディション部のテキストは、多くある可能性のうちの一つの例、すなわち「一本の導きの糸」にすぎない¹¹。アリアドネの糸を一本だと考えてはならない、というのがヘルダーリンのテキスト編集の鉄則なのである。

¹⁰ Ebd., S. 119.

¹¹ Ebd., S. 120.

ドキュメント部に続くエディション部では、書き起こされたテキストからさらにテキスト構成が行われる。その際も、伝統的なテキスト・資料篇モデルを廃して、新しいモデルによってテキストを提示していく。その発想の根幹を見るために、フランクフルト版の第1巻に掲げられたエピグラフに注目してみたい。主にヘルダーリンの最初期の詩を集めた第1巻は1995年と比較的後の方に編集されたが、第1巻の冒頭という場所が重要であることに変わりはない。ザトラーはここに、ヘルダーリンの「オークの木々」(*Eichbäume*)の詩の一節を載せている。

O daß mir nie nicht altere, daß der Freuden
daß der Gedanken unter den Menschen, der Lebens-
zeichen keins mir unwerth werde, daß ich seiner mich schämte,
denn alle brauchet das Herz, damit es Unaus-
sprechliches nenne.

Stuttgarter Foliobuch, p. 8

ああ何も古びないように。喜びも
人々が交わす思いも、生の
しるしも、価値のないものなどない。それを恥じたりしまい。
なぜなら心はそのすべてを必要とするから。いわく
言いがたいものを名づけるために。

シュトゥットガルト・フォリオノート、8ページ

これはヘルダーリンが詩作において、いかなる対象も「価値のないものなどない」、詩作は「そのすべてを必要とする」という認識を語る詩句だ。ザトラーはこれをフランクフルト版の理念と照応するものだと暗示する。すなわち、ヘルダーリンの残したテキストに「価値のないものなどない」、すべてを優劣つけずに提示するのが根本理念だというわけである。加えて重要なのが、この詩句がシュトゥットガルト版ではテキストの部分ではなく、異文の片隅に収録されていることだ¹²。つまり今までは暗に価値の劣るもの、正統なテキストに対して副次的なものだとされてきた、少なくともそのような場所に置かれてきたテキストを、フランクフルト版はフェアに提示するのだという意図が込められているのである。

それでは具体的にどのような方策が取られるのか。それはまず完成されたレーゼテキストを最初に置くのではなく、直線的テキスト提示 (Lineare Textdarstellung) というテキストの形成過程を可視化する部分が最初に来て、その後にレーゼテキストが来るという段階的構成である。先ほど図1で提示した箇所直線的テキスト提示が図2である。

¹² StA 1.2, S. 502.

見ての通り視覚的に一直線というわけではない。このlinear（線的、直線的）に込められた意図は、おそらく空間的に厳密に再現されていたドキュメント部のテキストが、行ごとの線的な並びのなかに置き換えられ、修正された語が詩行のどの部分に入るのか分析されていること、そして書き加えられた順番が視覚的に分かるような時系列的発想に貫かれていることだと思われる。いずれにせよ、この方法によってレーゼテキストにいたるテキスト形成の過程までもが可視化されることになる。

このような線的構成は、結局のところ一つの完成したテキストを到達点とする目的論的発想があるという点で、ザトラーが批判したはずのシュトゥットガルト版と同じ轍を踏んでいるのではないかという批判もある¹³。こうした問題点についてはザトラーも自覚的だったようで、レーゼテキストが完成したものとして評価されないことがないように注意を促している。レーゼテキストが提示されるのは、あくまでヘルダーリンが清書をした後に改訂を行っていない場合や、印刷されたものがある場合などに限られるのであって¹⁴、そこまで至る過程が可視化された形で表示されていることが重要なのである。またできる限り一つの作品へと収束させようとするシュトゥットガルト版に対して、フランクフルト版ではテキスト形成の過程で、状況や場合に応じて非改訂テキスト、改訂テキスト、別テキスト、構成テキスト（unemendierter, emendierter, differenzierter, konstituierter Texte）など、さまざまな段階へとテキストが差異化される。これらのテキストはヘルダーリンによって書き加えられた部分以外の箇所も補完して構成される結果、重複するテキストが何度も提示されることになり、収録されるテキストの絶対量が増大する。このような事態について、ザトラーは以下のように述べる。

この版の特色は、多層的で込み入ったオーデの成立史の編集においてとくに明らかになる。可能な限り、テキストの各段階は、独立するものとして表現し、異文に解消しなかった。量的増大と質的増大は一致する——このことは、他のところでは議論の余地があろうとも、ここでは否定しようがないことだ。なぜならテキストの外延が、テキストが自らへといたる運動をあとづけ、その追体験を可能にし、詩の周辺ではなく中心に来るからである。¹⁵

一般的な編集が、掲載にふさわしいものを選定する点で、テキストの量的減少を編集の質的向上と見なすのだとすれば、フランクフルト版は逆に、テキストを量的に増大させることを質的向上と見なす。そしてさらに、一個の完成したテキストとそこから弾かれた異文という形ではなく、各段階のテキストを独立したものとして表現することで、テキストがダイナミックに生成していく過程をたどれるようになるのである¹⁶。

こうしたザトラーの編集方針は、完成した作品の提示をモデルとする静的なテキスト

¹³ Burdorf (1993), S. 182.

¹⁴ Sattler (1975/77), S. 127.

¹⁵ FA4, S. 11.

¹⁶ ここにはいわゆるフランス現代思想が提示したテキストやエクリチュールに関する新しい発想と通じるものがあるという考察もある。Vgl. Wackwitz (1990).

	Fortsetzung recto.		307/7
	Dorther kommt und zurück deutet	der kommende Gott.	3
54		da lachtet verpflanzt, []	2
55-58	wie V		4-8
	Aber die Thronen, wo? die Tempel, und wo	die Gefäße,	10
	¹ Geseze der Erde		9
59		² , und Schritte [.]	9,11
	Wo mit Nectar gefüllt, Göttern zu Lust der	Gesang?	13
	¹ Dank		11
60		² schreitend in Winkeln	12
	Schritte vmtl. im Hinblick auf schreitend in Winkeln irrtümlich unter statt über Gefäße.		
	Wo, wo leuchten sie denn, die fernhinterfendenden Sprüche?		15
61	bedeuten ↑	bäurisch sinnigen	14
	Delphi schlummert und wo tönet	das große Geschik?	18
	¹ Schaale		17
	² ist Delphi, wo greift, trifft dich		17
	³ begreifts	kindlich	16
62		[.] ⁴ besser, erfület es sich	16
	Wo ist das schnelle?	wo brichts, allgegenwärtigen Glücks voll	21
	¹ Daß es einhält,		20
63		² wahr wird, denn	19
64	Donnernd aus heiterer Luft über die Augen herein?		22
	Vater Aether! so riefs und flog von Zunge zu Zunge		24
	¹ verzehrt und strebt, wie Flammen, F		23
65		² zur Erde,	23
	Tausendfach, es ertrug keiner das Leben allein;		26
	¹ liegt wie Rosen, der Grund		25
	² Kommet der Gott. Unt liegt		25
66		[k]	
	Mglw. disponiert die Schreibung Kommet eine Umstellung:		
66a	Kommet der Gott, tausendfach. Unt liegt wie Rosen, der Grund		
	Ausgetheilet erfreut solch Gut und getauschet, mit Fremden,		28
	¹ Ist vergänglich		27
67	² Himmlichen ungeschikt, vergänglich, aber wie Flammen		27
	Wirds ein Jubel, es wächst schlafend des Wortes Gewalt		30
68	Wirket von oben, und prüft Leben, verzehrend, uns aus.		29
	Vater! heiter! und halt, so weit es gehet, das uralt		33
	¹ Aber Seher		32
	² Die aber deuten dorthin und		31,32
	³		32
69	⁴ dort [und] da und heben die Häupter		31,32
	Zeichen, von Eltern geerbt, treffend und schaffend hinab.		35
70	Menschen aber, gesellt, theilen das blühende Gut.		34
	Denn so kehren die Himmlichen ein	, tiefschütternd gelangt so	37
71	Das Verzehrende. So kom[m]t Himmliches		36
	Vgl. Heimkunft VI v. 78, 79. Mglw. disponiert eine Streichung in So unausgeführte Änderungen.		
	Aus den Schatten herab unter die Menschen ihr Tag.		39
72		sein	38

図2 FA6, S. 252f. より

図3の部分に該当する直線的テキスト提示の部分。書き起こされた文字が、詩業のどの部分に入るのかが記されている。右の列の数字は、下線の引かれた307/7が手稿の資料番号、それ以下が手稿内の行数である。左の列の数字は、作品全体における行数を示している。

観に対して、生成過程を捉えようとする動的なテキスト観が台頭していた当時の編集文献学研究を参照するものでもあった¹⁷。この生成論的関心は、フランクフルト版の編集理念の柱の一つである。つまり、テキストがどのような順番で形成されたのか、徹底的に時系列のレベルで明らかにしようとする。ザトラーが全集各巻の導入でよく用いる表現を使えば、一字一句、時系列で、生成論的に (buchstäblich, chronologisch, genetisch) テキストの形成過程を追求するのである。ここで詳細な例を挙げることはできないが、テキストの書かれた年代に関して、フランクフルト版はきわめて多くの新説を提唱しており、有力な意見として受け取られている。ザトラーにとって史的批判版の理想は、テキストが書かれた順番を一字一句、時系列で、生成論的に再現することだったのだ。

3

以上のような編集が行われた前代未聞の全集は、伝統的権威の批判を目指す学術潮流、ドキュメント部を可能にした印刷技術、最新のテキスト概念などが集約された、まさに時代が求める全集だったと言える。それゆえ大きな衝撃を持って受け止められ、ローター・シュテルン社はこの成功を機に、ハインリヒ・フォン・クライスト、ゴットフリート・ケラー、フランツ・カフカ、ゲオルク・トラークルといった作家たちのファクシミリ版全集を出版する、学術編集の分野で独自の存在感を放つ出版社へと成長していくことになった。なお、1979年からローター・シュテルン社は、ヘルダーリンに由来する言葉であるシュトレームフェルト (Stroemfeld) を社名に用いるようになる。

またフランクフルト版全集は、ヘルダーリン研究の展開にも多大な貢献を果たすことになった。例えば、戦後を代表するヘルダーリン研究の著作を残したペーター・ソンディが「詩の展開過程の分析」、あるいは——アドルノの言葉を引きつつ——「作品の産出状態の論理」¹⁸の追求が、方法論として求められていると主張するなど、ヘルダーリンがテキストをどのように書き換えたかという改訂過程を重視する研究が求められていた。こうした研究に、ザトラーの全集がうってつけであることは言うまでもないだろう。フランクフルト版は、ヘルダーリンがアクチュアルな詩人として関心が高まる時代状況に呼応して、読者をヘルダーリンのテキストに近づけ¹⁹、さらに70、80年代に大きく転回するヘルダーリン研究の動向を、力強く後押しする役割を果たすことになったのである。

フランクフルト版全集は、古典韻律に範を取ったジャンルであるエレギーやオーデ、詩学論文、多くの草稿を含む小説『ヒューベリオン』や悲劇『エンペドクレスの死』などの巻を順調に重ねていった。70年代は毎年、80年代もせいぜい一年間空けるだけというペースで計画は進んだ。しかしフランクフルト版の編集理念は、未完の作品を多く残し、一度完成した作品ですらいく度も修正を加えていくヘルダーリンの執筆スタイルのためにこそ考案されたものであって、その代表的なテキストの大半を擁する第7、8

¹⁷ 例えばザトラーは、Martens / Zeller (1971) に依拠している。

¹⁸ Szondi (2011), S. 286.

¹⁹ Vgl. Hoffmann / Zils (2005), S. 225.

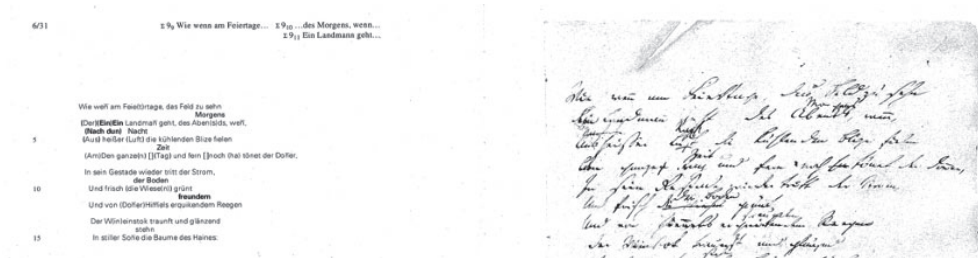


図3 FA7, S. 102より

右が手稿のファクシミリ、左が文字起こしである。左上にある6/31は手稿の資料番号。その横にあるΣ₉ Wie wenn am Feiertage… / Σ₁₀ …des Morgens, wenn… / Σ₁₁ Ein Landmann geht… がセグメントの識別ナンバーである。ΣX という記号によって、まずはセグメントを識別し、ΣX_xによってセグメントの生成過程に順序づけがなされている。この手稿には一つのセグメントにおいて3つの生成論的要素が含まれており、それがエディション部において、テキストとして形成されていくことになる。

巻の出版は、2000年まで待たなくてはならなかった。ところがすでに述べた通り、フランクフルト版の集大成であるべきこれらの巻——第7巻がドキュメント部、第8巻がエディション部となっている——は、その理念をつきつめたものでありながら、あるいはそうであるがゆえに、史的批判版全集として無視できない欠点を抱えるものになってしまった。

ザトラーは当初から概念の明確な定義づけや、論の緻密な構築を拒むタイプの文章の書き手ではあったものの、2000年前後にはそれが尋常ではない域に達するようになる。小文字で表記し、ドイツ語の特殊文字もピリオドも用いない奇天烈なスタイルもさることながら、「巫女の神託めいた不可解な文体と大仰なレトリック」²⁰と言われるほど理解を拒絶するような文章を書くようになるのである。

こうしたなかで第7、8巻に導入されたのがセグメント (Segment) というテキストの単位区分と、それを識別するシグマ (Σ) の記号である (図3)。ドキュメント部の文字起こしのページの上に、数字の振られたシグマ記号と冒頭の詩句が記され、その手稿にどのテキストセグメントが含まれているのかが表示されるのである。

このセグメントという単位について、ザトラーはほとんど明確な定義づけをしていない²¹。しかしその意図は明らかで、当初からの動機である「テキスト選定の拒否」を徹底することに他ならない。例えば、後期詩『パトモス』には、清書稿、出版稿、後の改稿などさまざまな種類のテキストが存在するが、ザトラーはそれを全ていっしょくたにセグメントという単位に統合した上で、例えば清書稿はΣ₂₄₁₅、Σ₂₄₁₆、出版稿はΣ

²⁰ George (2000/01), S. 351.

²¹ 用語自体は、「テキストセグメント (Textsegment)」という形で70年代の論考にも見られるものの、ここでも明確な定義を示していない。Vgl. Sattler (1975/77), S. 118.

24₁₈、後の改稿はΣ150、Σ152などとする。ヘルダーリン自身がつけたタイトルよりもセグメントという単位が上位区分である。当初はエディション部の最終段階に置かれていたレーゼテキストすら取り払われて、全てがセグメントとして抽象的な平等性が貫徹されるのである。

このセグメント・システムは、ヘルダーリンのテキストの形成過程を他のどの全集版よりも詳細に伝え、テキストと資料篇の区分をラディカルな形で無効化しているのは間違いない。しかし抽象的平等化とそのなかでの生成論的再現をつきつめていった結果、このフランクフルト版は、学術版全集として恐ろしく扱いにくいものになってしまった。まず各セグメントの配列は、おおむねシグマ記号の番号順になっているものの、その数字が前後するという事態が頻繁に起こる。例えばΣ30～Σ32の後にΣ24₁₄～Σ24₁₈が来る。続いてΣ197、Σ198が来る。その次はΣ34、Σ35…という具合でまったく見通しがきかない。実際に読んでいくと、ΣX₁というセグメントの始まりがどこで、ΣX_xはどこまで続くのか判断するのが実質不可能なため、何度も索引を見て、ばらばらのピースをかき集めるようにして、セグメントを読んでいかなければならない。これはかなり骨が折れる作業であり、少なくとも読解の集中力を削がれる工程である。

このセグメントは独特な単位である。それは基本的にヘルダーリンが筆を加えた箇所を起点に生成するのだが、その際しばしば部分的な提示で途切れて、ΣX_xからΣX_yへ移行する。またΣX_zは出版稿に相当し、作品全体のテキストが提示されたりする。もちろんセグメントの範囲や、番号が切り替わる理由は明らかにされない。またセグメントの配列順序も謎めいている。基本的にはヘルダーリンが執筆した順番という時系列的再現を目指している、とは言えるだろう。しかしセグメントはすでに述べた通り、ヘルダーリンが新たに書き加えた箇所だけではなく、以前のセグメントですでに書いていた箇所、またヘルダーリンの手を離れた出版稿なども再現している。それゆえこのセグメントの順序は、完全な時系列とは異なる秩序を持っていることになる。実際、ザトラーはフランクフルト版の最後である「時系列統合エディション」と題する第20巻で、詩も小説も手紙もあらゆるテキストを一括して時系列で示す年表を作成したが、これを第7、8巻のセグメントと関連づけることはしなかった。そしてさらに読者を困惑させるのが、この第20巻で導入されている作品セグメント (Werksegment) という区分である。ここでは総合目録のために、詩や小説、戯曲に作品記号 (w) が付され、ナンバリングが施されている。そしてその下位区分に作品セグメントが置かれるのだ。再び『パトモス』を例に取れば、作品番号はw244、作品セグメントはw244-1からw244-8:13までである。これが数的に第7、8巻のセグメントの数と合わないことも問題だが、それだけではない。この作品セグメントは、概念的にも第7、8巻のセグメント概念と対立するのである。ザトラーのなかで第7、8巻が出版された2000年から、第20巻の2008年までに心変わりが生じたのか、あるいは両概念を共存可能にする発想があったのかどうかは不明だが、いずれにせよセグメントと作品セグメントの間の対応関係は明示されていない。ゆうに500を越す第7、8巻のセグメントが一体どういう規則で並んでいるのか。このテキスト・モンタージュを苦勞して読み解いたとしても、ヘルダーリンの理解にたどりつ

くのではなく、単にザトラーの隠された編集意図を垣間見るにすぎないのではないか²²。あまりに複雑なセグメント・システムは、フランクフルト版の柱の一つであったはずの透明性の原理を打ち消してしまうのである。

このセグメントの概念において、同時に考慮されねばならないのは、第7、8巻のタイトルにもなっている „gesänge“ である。これは「歌」を意味するドイツ語 Gesänge から来ているが、フランクフルト版のタイトルのなかで唯一頭文字が小文字になっており、特別な巻であることが窺われる。ただしヘルダーリンの後期詩を、この「歌」において区分するという発想自体は、シュトゥットガルト版に由来する。シュトゥットガルト版では、エレギーでもオーデでもない自由韻律の詩のために、ヘルダーリン自身が詩のなかで言及する「歌」という言葉、そしてとりわけ1803年12月のフリードリヒ・ヴィルマンス宛の書簡のなかで用いた表現に基づいて²³、「祖国の歌」(Die vaterländischen Gesänge) という区分が設けられている。ザトラーの „gesänge“ は、ここから「祖国の」という形容詞を取り去ることで、ナチス時代に喧伝された愛国詩人のイメージから距離を取るものだと、まずは理解できよう。しかしザトラーは、この „gesänge“ にも特別な意味を持たせているように思われる。

第7、8巻に収められたテキストは、ザトラーによれば「統合的な歌のコーパス」を指し示しているという²⁴。すなわちザトラーが編み出したセグメントは、「統合的な歌」という全体性を前提とする概念なのである。しかしヘルダーリンがただ一つの「歌」を詩作していたという発想は、ハイデガーの「あらゆる偉大な詩人は、ただ一つの詩から詩作を行う」²⁵という有名な言葉にも似て、ある種の箴言的な洞察力はあるものの、それ自体に根拠はなく、編集の指針とするにはいささか神秘的にすぎる。

さらに不可解なのが、ザトラーが „gesänge“ をめぐって24に関わる数字に執拗なこだわりを見せている点である。例えばザトラーは、第7、8巻の「統合的な歌」たる全セグメントに、ひそかに24の内的区分を設けている。その理由ははっきり説明されていないと思われるが、一つ理由として考えられるのが、ザトラーが独自に主張している「西洋の歌」(hesperische Gesänge) という、 „gesänge“ とは別種の構成原理を持つ作品区分である。これもザトラーがほとんど説明なしに用いている用語の一つだが、その内実としては、12の「歌」からなり、それが「二重の歌」(Doppelgesang) として、表と裏のようなペアとしてヘルダーリンが構想していたのだという²⁶。実際、フランクフルト版の第20巻では、この「西洋の歌」が、 α バージョンの12の歌、 β バージョンの12の歌、という形で収録されている。第7、8巻の „gesänge“ は「西洋の歌」を含むより大きな区分であるものの、全セグメントを24に分けるといふ不可解な行為は、この辺りの事情

22 ヴォルフラム・グロデックはこのような事態をさして、「見るも無惨なテキストモンタージュ」、「編集権の乱用」という厳しいコメントを行なっている。Groddeck et al. (2003), S. 10.

23 Vgl. StA6, S. 436.

24 FA8, S. 535.

25 Martin Heidegger: Gesamtausgabe. Hrsg. von Friedrich-Wilhelm von Hermann u. a. Frankfurt am Main (Vittorio Klostermann) 1975ff., Band 12, S. 33.

26 FA8, S. 537.

と絡んでいるのだと考えられる²⁷。

こうした発想に含まれるザトラーの考え、すなわちヘルダーリンの詩作にはある種二つの方向性があり、それがさまざまな作品で「二重の歌」という形に結実するという考えは、十分に検討に値する刺激的な「解釈」である。しかし史的批判版の「編集」の原理とするには、あまりに曖昧であり、唐突であり、何より十分な説明や論証が欠如していると言わざるを得ない。

4

以上のようにザトラーのセグメント・システムは、フランクフルト版の到達点でありながら、最後には理念としての一貫性が失われ、編集方法の不透明さと不可解さを招来することになった。確かにこうした問題はフランクフルト版の最終段階に至って顕在化した。しかしその根本はすでに出発点に存在していたと言える。

一つはザトラーの非学術的とも言えるスタンスである。ザトラーは1970年代の論考でテキストセグメントについて言及した際に、シュトゥットガルト版のバイスナーが異文や断片へと「切断」したものを、むしろ「結合」することを宣言していた。客観的な根拠がないために断片として編集すべき場合でも、ザトラーは「結合」によって新しいテキストセグメントを生み出す方針を示していたのである²⁸。

その点で、フランクフルト版の特徴として挙げられる「透明性」は²⁹、必ずしも編集の客観性、明証性、合理性を意味するものではない。むしろ編集の主観性が読者に対して可視化されているということが、ザトラーにとっての透明性だった。編集者は存在論的にすでに主観的解釈者なのであって、その解釈が妥当かどうかの検証は、フランクフルト版の読者に課された義務なのである。

こうした観点からフランクフルト版全集を振り返ってみると、最も過大だったのは、読者への要求だったように思われる。ザトラーは仲介者としての編集者が、読者から余計な負担を取り除くような編集、あらかじめ読むべきテキストを厳選して読者に供するような編集を、時代遅れのものとみなしていた。あらゆる権威や伝統に対して批判的に思考する市民のように、粘り強くテキストを読む訓練を積み、編集者と同じ地平で解釈を繰り広げる自律的読者を、ザトラーは期待していた。このような読者への高すぎる要求が、読者から不可視の場所で行っているのと変わらないほど複雑な解釈的編集へと至らせてしまったのだろう。

このような結果は、ザトラーがかつてシュトゥットガルト版全集に差し向けていた批判に、自らが刺されたような感がある。ザトラーはシュトゥットガルト版によるヘルダーリン・イメージの歪曲やごまかしを正すと主張したが、最後には神秘主義すら匂わせる独自の解釈を埋め込んだテキスト群という新しい謎を生み出す結果になってしまった

²⁷ この点についてグロデックは、セグメントがΣ 288 までであることも関連付け、最終的にヨハネの黙示録の 144 千人の義人という宗教的な数字と関わりがあるのではないかと推察している。Vgl. Groddeck et al. (2003), S. 16.

²⁸ Sattler (1975/77), S. 118.

²⁹ Vgl. Plachta (2020), S. 172.

からだ。しかしたとえそうだとした場合、フランクフルト版の歴史的功績は、なおも高く評価されねばならない。まずファクシミリによる再現と書き起こしを貫徹したドキュメント部の資料価値は恒久的である。また手稿からテキストが形成される過程を生成論的に提示するという理念は、ヘルダーリンのデジタル・アーカイヴにおいて、より現代的な技術的前提のもとで実装されつつある³⁰。こうした文献資料の提示方法を開拓したこと、また他のファクシミリ版全集の出版に先鞭を付けたことについても、歴史的に大きな功績が認められるべきだろう。またフランクフルト版全集の存在が、ヘルダーリンが20世紀の学術潮流の最前線にいることを印象付ける大きな要素であり続けたことも付け加えておこう。

またエディション部の「解釈」についても、ザトラー関係の資料が今後まとめられることで、より良い形で理解される可能性もあるだろう。例えば「二重の歌」のテーゼは、今のところほとんど議論されていないと思われるが、ヘルダーリンの詩に対して新しい視座を開く可能性のあるユニークな主張であることは間違いない。

しかしフランクフルト版全集の成功と失敗を引き継いでいく道は、他にもあるように思われる。それはザトラーが結果的に隠すような格好になってしまった編集過程における「解釈」を、透明化ないし可視化する方向である。つまりザトラーが読者に開いた「編集」の場だけでなく、注釈等を充実させることを通じて「解釈」の場をも開くことを目指すのである。このような全集版は、むしろ邦訳のヘルダーリン全集に求められているかもしれない。1960年代に手塚富雄らによって訳された河出書房社版『ヘルダーリン全集』は、時代的に当然ながらシュトゥットガルト版に依拠している。そしてそれは、必要最低限の注釈を下段に付し、翻訳の文体は、モダニズム文学にも通じるヘルダーリンの詩的言語についてほぼ考慮せず、ヘルダーリンがどのような意図でその詩句を書いたのかを忠実に読み再現するものになっている。この功績の大きさについては改めて述べるまでもないが、その後のヘルダーリン研究によって進んだ理解の水準からすれば、ある種の偏りや不足が目立つのも事実である。それに対して新しい邦訳の全集版は、今までの研究成果を編集や翻訳のなかに説明のないまま結晶化させることを目指すのではなく、むしろ読者を研究の現場、解釈の現場に引き込むような方法が試されるべきではないか。それは例えば、ヘルダーリンの受容史や研究史を踏まえた詳細で的確な注釈の実現によって可能になるのではないか。もちろんこれは一案にすぎない。しかしフランクフルト版の成果を、その失敗した部分を含め引き継いでいくことが、学術編集においてきわめて重要な課題であることは間違いない。

³⁰ Vgl. <https://homburgfolio.wlb-stuttgart.de/> (Zugang: 28.11.2023)

参考文献リスト

- Bertaux, Pierre: *Hölderlin und die Französische Revolution*. Frankfurt am Main (Suhrkamp) 1969.
- Biener, Berhard: Wenn Hölderlin zum Teil der Familie wird. In: *FAZ.NET*, am 20.03.2021: <https://www.faz.net/aktuell/rhein-main/region-und-hessen/editionsarchiv-von-d-e-sattler-ist-nun-zugaenglich-17250434.html> (Zugang 28.11.2023)
- Burdorf, Dieter: Edition zwischen Gesellschaftskritik und ›Neuer Mythologie‹. Zur ›Frankfurter Hölderlin Ausgabe‹. In: *Hölderlin Entdecken. Lesarten 1826-1993*. Hrsg. von Volke, Werner / Pieger, Bruno / Kahlefeldt, Nils / Burdorf, Dieter. Tübingen (Hölderlin Gesellschaft) 1993, S. 164-195.
- George, Emery E.: Das Tao der Unübersichtlichkeit. Über die Bände 7/8 (gesänge I, II) der Frankfurter Hölderlin-Ausgabe. In: *Hölderlin-Jahrbuch 32* (2000/01), S. 345-365.
- Groddeck, Wolfram / Martens, Gunter / Reuß, Roland / Staengle, Peter: Gespräch über die Bände 7 & 8 der Frankfurter Hölderlin-Ausgabe. In: *TEXT 8* (2003), S. 1-55.
- Hoffmann, Dierk O. / Zils, Harald: Hölderlin-Editionen. In: Nutt-Kofoth, Rüdiger und Plachta, Bodo (Hrsg.): *Editionen zu deutschsprachigen Autoren als Spiegel der Editions-geschichte*. Tübingen (Max Niemeyer Verlag) 2005, S. 199-245.
- Hölderlin, Friedrich: *Sämtliche Werke. Große Stuttgarter Ausgabe*. Hrsg. von Friedrich Beißner. Stuttgart (W. Kohlhammer) 1943-1985. [StA]
- Hölderlin, Friedrich: *Sämtliche Werke. Frankfurter Ausgabe*. Hrsg. von D. E. Sattler u. a. Frankfurt am Main (Stroemfeld/Roter Stern) 1975ff. [FA]
- Hölderlin, Friedrich: *Sämtliche Werke und Briefe*. Hrsg. von Jochen Schmidt. Frankfurt am Main (Deutscher Klassiker Verlag) 1992-94.
- Hölderlin, Friedrich: *Sämtliche Werke und Briefe*. Hrsg. von Michael Knaupp. München (C. Hanser) 1992f.
- Martens, Gunter / Zeller, Hans (Hrsg.): *Texte und Varianten. Probleme ihrer Edition und Interpretation*. München (C. H. Beck'sche Verlagsbuchhandlung) 1971.
- Müller, Ralf: Gesänge I+II. In: *Deutschlandfunk*, am 12. 08. 2001: <https://www.deutschlandfunk.de/gesaenge-i-ii-100.html> (Zugang: 28.11.2023)
- Plachta, Bodo: *Editionswissenschaft. Handbuch zu Geschichte, Methode und Praxis der neugermanistischen Edition*. Stuttgart (Anton Hiersemann) 2020.
- Sattler, D. E.: Friedrich Hölderlin 'Frankfurter Ausgabe'. Editionsprinzipien und Editionsmodell. In: *HjB 19/20* (1975/77), S. 112-130.
- Szondi, Peter: Hölderlin-Studien. Mit einem Traktat über philologische Erkenntnis [1967]. In: Ders.: *Schriften I*. Berlin (Suhrkamp) 2011, S. 261-412.
- Wackwitz, Stephan: Text als Mythos. Zur Frankfurter Hölderlin-Ausgabe und ihrer Rezeption. In: *Merkur 492* (1990), S. 134-143.

Critical Analysis of the Frankfurt Historical-Critical Edition of Hölderlin's Complete Works: Unveiling Methodological Challenges and Historical Significance

Toshiro EKI

This scholarly review critically examines the Historical-Critical Edition of the Complete Works of Friedrich Hölderlin, edited by D. E. Sattler (commonly known as Frankfurter Ausgabe). Reflecting the socio-cultural zeitgeist of 1960s West German society, the edition combines a critique of traditional authority, innovative printing technology enabling facsimile documentation, and the latest concept of generative text. While liberating the act of editing and influencing textual scholarship history, the edition's impact on Hölderlin studies is substantial. Nevertheless, the advent of Volumes 7 and 8 (gesänge I and II) in the 2000s unveils methodological problems within Sattler's edition. These include an excessively complex segment system, arbitrary interpretive editing, an editorial principle devoid of scholarly rigor, and too high a demand on the reader. Despite these challenges, the Frankfurt edition remains a historical achievement, prompting a future need for editorial strategies, such as detailed annotations, to uncover concealed interpretive layers and enhance accessibility for readers.